

## 稚内・サハリン国境観光の可能性を探る



高田 喜博 (たかだ よしひろ)

公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター (HIECC) 上席研究員

### はじめに：国境観光とは

日本ではあまり聞き慣れなかった「ボーダーツーリズム」あるいは「国境観光」という取り組みが注目を集めるようになり、最近は新聞やテレビなどでも取り上げられるようになった。このボーダーツーリズム・国境観光は、“国境”を地域資源の一つとして活用し、観光による人の流れをつくり、地域を活性化させようとするものであるが、その定義や内容は未だ確定していない。例えば、この取り組みを開始した北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの岩下明裕教授は、「ボーダーツーリズムは、国境に接した境界地域を“砦”ではなく“交流拠点”と考え、境界地域ならではの体験を楽しもうという旅行スタイル」だとして、「境界地域であることを観光魅力の一つと捉え、境界地域を『見る』『渡る』『比較する』ことで新たな魅力を生み出し、観光客の増加へと結びつけることで境界地域の地域振興を図ることを目的とする」としている。

具体的には、国境・境界地域の問題に取り組んできた北海道大学、境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN)、特定非営利活動法人国境地域研究センターの三者が関与した2013年12月14～15日の「対馬・釜山国境観光モニターツアー」から始まり、2015年3月には第2回目の「対馬・釜山国境観光モニターツアー」が実施された。

その前後には、福岡市、竹富町（沖縄県八重山郡）、札幌市、東京都で国境観光をテーマにセミナーが開催され、その可能性と課題について議論された。

その成果を踏まえて、15年6月15～19日に、国境を挟んで隣り合う稚内市とサハリンをセットで観光する「稚内・サハリン国境観光モニターツアー」が実施され、筆者が所属するHIECCも協力した。本稿では、ツアーの結果と今後の展望について報告する。



## 観光振興と国境観光の関係

議論の前提として、観光振興の意義と国境観光の位置づけについて考えておきたい。

一般に、観光による経済波及効果は、サービス業、運輸業、小売業、農業、水産業など、幅広い分野に及び、地産地消と結びついて地場産業を活性化させ、地域の雇用（就業機会）や税収を高める。また、人口の減少や高齢化が進む地域では、観光交流による人の移動、あるいは、交流人口の拡大が地域を活性化させると考えられており、観光による訪問を契機にリピーターとなり、それが二地域居住や季節移住へ、さらに定住へと発展することが期待されている。さらに、他の地域、特に外国から観光客を受け入れることにより、地域の伝統文化と異文化との交流が促進され、地域の文化や歴史が見直され、新しい地域文化が創造されることが期待できる。

観光には、このようにさまざまな効果が期待でき、政府も「観光立国」を目指していることから、ほとんどの自治体や地方が積極的に観光振興に取り組んでいる。他方、このことは地域間競争の激化を意味している。しかし、多くの場合、既存の観光から脱却することができず、また、地域資源を有効に活用しきれていないのが実情である。



国境観光は、国境に隣接する地域にしかない“国境”を一つの地域資源として活用し、他の資源と結びつけることで付加価値を高め、競争力のある商品とする戦略的な取り組みである。言い換えると、“国境”をテーマとして地域の自信と観光客を引きつける魅力を創造する、いわば「創造的観光」の取り組みである。

## 稚内・サハリン国境観光の結果

### 参加者の概要

今回のツアーに参加した32名にアンケート調査を実施した。その内訳は、男性20名、女性12名で、平均年齢は56.7歳（男性58.1歳、女性55.8歳）、最高齢は86歳で、半数を超える17名が60歳以上だった。

居住地は、道外14名（遠くは九州で、関東圏の他、京都府、山口県、新潟県など）、道内18名（札幌7名、地元稚内2名、その他9名）であった。

訪問回数を尋ねたところ、初めて稚内を訪問したのは9名、初めてサハリンを訪問したのは26名で、国内の一般的な観光地である稚内と、あまり馴染みのない外国であるサハリンとの差が現れた。

### 参加の動機

ツアー申し込みをする際の決め手を複数回答可で尋ねたところ、「サハリン（旧樺太）を観光できる」29名、「コルサコフ（旧大泊）を観光できる」29名、「ユジノサハリンスク（旧豊原）を観光できる」27名、「ドリンスク（旧落合）を観光できる」24名など、サハリン観光に関する項目が多数挙げられた。同時に「国境地域の歴史に触れ学ぶことができる」29名、「国境地域の現在を観光し体験できる」25名、「稚内経由サハリン行きの珍しい行程である」23名など、国境観光に関連する7項目が上位を占めた。

中位では、「国際フェリーに乗船して船旅が楽しめる」22名、「国境観光という言葉に興味を持った」22名、「プリゴロドノエ（旧深海）の観光ができる」22名、「お得な価格」21名などであった。

これに対して、稚内観光の定番である「稚内で食事

や買い物を楽しむことができる」9名が最下位で、「稚内および周辺の観光地を訪問できる」14名、「サハリンでの食事や買い物」19名などが下位となった。

以上から、買い物や食事という一般的な観光とは異なる、国境に関連するニーズがあることが確認できた。

## 稚内市内観光

15日の昼に稚内に集合した参加者は、稚内市役所の協力で、稚内公園、宗谷丘陵、宗谷岬、開基百年記念塔（北方記念館）などを観光した。市職員中川善博さんの詳しくて愉快的案内、北方記念館学芸員斉藤譲一さんの専門的な解説が好評だった。通り一遍の観光ではなく、地元の人たちの熱のこもった説明が稚内観光の魅力を高めた。その結果、稚内観光の満足度に関しては、「とても満足できた」36%と「やや満足できた」43%を合わせた約80%が満足したと回答した。

## サハリン観光

翌16日にフェリーでサハリンに移動した。5時間半の乗船時間の一部を利用して、北大の岩下明裕教授や中京大学の古川浩司教授のミニ講義や参加者の自己紹介が行われた。

17日は、プリゴロドノエ（旧深海）の液化天然ガス工場や旧女麗に建つ日露戦争日本軍上陸記念碑、コルサコフの旧大泊港を見下ろす韓国人望郷の丘や市役所前のレーニン像、ユジノサハリンスクの州立郷土博物

館やシティ・モール（大型ショッピングセンター）などを観光した。ロシア人現地ガイドの案内の他、上陸記念碑、郷土博物館などで、サハリンの歴史に詳しい北大の井潤裕研究員に解説してもらった。

アンケートで「サハリンで印象に残った・満足した」ものを尋ねたところ、郷土博物館での解説が第1位、その展示が第2位であった。また、第4位のプリゴロドノエや第6位のサハリンと日本・稚内の歴史的つながりなど、現地で専門的な解説が実施された項目が上位に入った。やはり、専門的な解説の有無は国境観光の満足度に大きな影響を与えたようだ。

結果として、旅行全体の満足度に関しては、「とても満足できた」48%と「やや満足できた」36%を含めて、全体の84%が満足したと回答した。

## 稚内・サハリン国境観光の課題

### インフラの未整備

稚内では観光に必要な基礎インフラが整備されているのに対して、観光地化されていないサハリンでは、外国語（英語や日本語）の表示や説明、観光客が利用できるトイレなどが未整備で、その対応が急がれる。

また、稚内市や宗谷総合振興局などが観光情報の充実に努力しているが、地域資源を多言語でアピールする情報発信力をさらに高める必要がある。



稚内市宗谷公園（幕末の宗谷場所跡）で中川善博さんの解説を受けるツアー参加者



ユジノサハリンスク市内に残る旧樺太守備隊司令官邸（現軍事裁判所）

## テーマ設定とモデルコース

国境観光といっても、いろいろなニーズがあるので、「歴史」「文化」「自然」など複数のテーマとコースを用意すべきである。その場合には、国境に関連するテーマを説明できるガイド集団の存在は重要であり、例えば地元大学との連携で若いボランティアガイドを養成できるかが課題となる。

また、アンケートでは、地元の人たちとの交流を求める意見が複数存在した。そうした交流の場（地元の祭りやイベントへの参加など）を設定できるかが課題となる。

## 双方向の人の流れからモノの流れへ

観光交流とは、観光による双方向の人の流れを意味する。したがって、北海道からサハリンへの人の流れ（アウトバウンド）の次は、サハリンから北海道への人の流れ（インバウンド）の拡大が課題となる。ロシア人のニーズに合った国境観光にも取り組まなければならない。

中長期の課題としては、北海道とサハリンとの「人」の流れ（観光）から、それを「モノ」や「カネ」の流れ（貿易や投資）へ拡大・発展させる戦略が不可欠となる。例えば、道北観光と道や道北9市が開催する物産展などとの連携が必要であろう。そのためにも、交流の基礎インフラである稚内・コルサコフ間のフェリーの存続は重要だ。



サハリン州立郷土博物館の野外展示で井濶裕研究員の解説を受けるツアー参加者

## 今後の展望：地域を越えた広域観光連携

本稿執筆中の9月9～15日には、戦前の日ソ国境線である北緯50度線を訪ねるツアーが実施される。また、10月2～5日には、根室から稚内までのオホーツク沿岸をバスで旅する国境を越えない国境観光が実施される。道外では、10月22～27日に「八重山（石垣島、竹富島など）・台湾（台北、花蓮など）国境観光モニターツアー」が実施される予定であり、第3回目の対馬・釜山のツアーも準備中である。

今後、「稚内・サハリン国境観光」を継続し、その付加価値を高め、地域をより豊かで活気あるものにするためには、道内各地との連携はもちろん、「対馬・釜山」、「八重山・台湾」との連携が重要となる。すなわち、単独ではインパクトや広がり、あるいは、ブランド力やPR力が不足しがちな個々の自治体や地域が、「国境」という共通テーマで戦略的に連携することによって、新しい価値の創造に基づく観光、すなわち「創造的観光」を目指すのである。

今後は、そうした各地の国境観光の広がりとしそれらの連携を含めて、稚内・サハリン国境観光に注目していただきたい。



7月24日、札幌市で開催された「ボーダーツーリズム（国境環境）セミナー2015」で、筆者がモニターツアーの成果を報告